

(2015年11月10日)

## 北方四島交流事業と択捉島視察報告

日本安全保障戦略研究所長 高井 晋

### 北方四島問題の略史

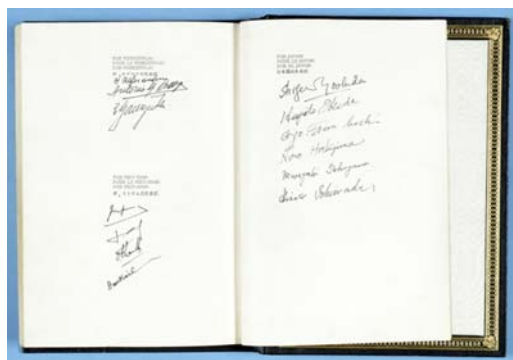
今年、第2次世界大戦が終了して70周年になる。第2次世界大戦の交戦国は、対日平和条約の発効に伴って、平時の国際法関係になった。しかしソ連(今日のロシア)は、対日平和条約の第2条c項に千島列島のソ連返還の文言がないことを不満に思い、対日平和条約調印を拒否し今日に至っている。戦後70年も経過しているのに平和条約が締結されないのは、極めて異常であり、国際法上も珍しいことである。

ソ連は、日ソ間に領土問題は存在しないと繰り返し主張していたが、その後、1956年に戦争終結宣言として日ソ共同宣言が締結され、日ソ関係は平時国際法の関係となったが、平和条約の締結は残された問題となった。日ソ共同宣言は、平和条約締結の暁には、歯舞諸島と色丹島をソ連人民の好意により日本へ返還すると期待された。しかしソ連は、米軍基地が日本から徹底後、歯舞諸島と色丹島の返還が実現されると一方的に通告してきた。

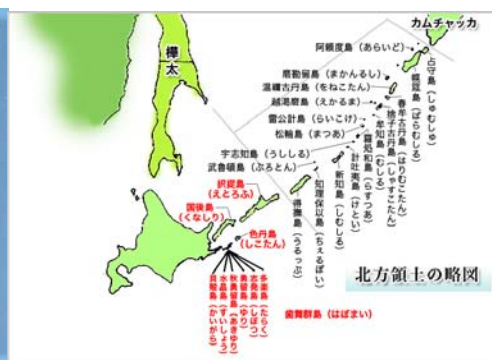
北方四島問題が膠着する中、ソ連のエリツイン大統領は、1990年1月16日、アジア調査会の講演で「北方領土五段階解決論」を発表し、「ソ連の側から領土問題は存在していると公式に宣言すること」および「日本側に歩み寄ってもらい平和条約を締結する」と言明し、日ソ間に領土問題が存在することを漸く認めた。

ロシア大統領のプーチンは、2001年3月25日のイルクーツク宣言、2003年1月10日の日露共同声明、2013年4月29日の日露パートナーシップ共同声明等において、北方四島問題を解決することにより平和条約を締結し、もって日露両国間の関係を正常化することを確認している。しかし、北方四島の日本への返還については何も明らかになっていないのが実情である。この間に旧島民の高齢化に伴う人道的配慮として、いわゆるビザなし渡航が実現することになった。

対日平和条約



北方領土の略図



### 北方四島交流

去る9月25日から28日までの間、今年度最後の北方四島交流(教育関係者・青少年訪問)に参加し択捉島を視察した。このいわゆる「ビザなし交流」は、1991年にゴルバチョ

フ首相が来日した際に提案されたもので、領土問題解決のための環境整備としての「四島交流」、元島民とその家族の「ふるさと訪問」としての「自由訪問」、元島民とその家族のお墓参りとしての「北方墓参」の三種類あり、北方領土対策協会と北方四島交流北海道推進委員会が事業を実施している。

ニ・ホ・ロ館

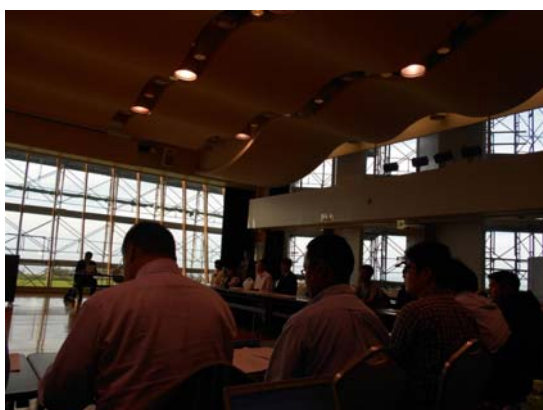


択捉島（訪問先は紗那と別飛）



前日の 24 日は、根室の北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ館）で結団式が行われ、参加者に対して訪問事業の意義と目的が示され、簡単なロシア語の指導が行なわれた。その後、中学生、高校生、大学生の 5～6 人が一組になり、音楽、ダンス、劇、絵画等の共同創作活動グループに分かれ、択捉島の中・高生との交流の打ち合わせを行なった。教育者交流に参加したのは、日本各地から参集した現役や教育委員会の先生方で、25～30 人ほどであった。

ニ・ホ・ロ館における結団式



根室琴平町側岸壁における関係者の見送り



翌 25 日の早朝に根室琴平町側岸壁からエトピリカⅢに乗船し、推進委員会のメンバーが見送る中を国後島へと出発した。出発後 1 時間半ほど経過した頃に通過点を越え、13 時頃に国後島の古釜布沖に到着し、古釜布港から舁ってきたロシア側の入国管理間、税関等による入域手続きが行なわれた。直前の 8 月 31 日に実施された北方墓参団は、書類の不備を理由にロシア側から上陸を認められなかったこともあり、緊張を強いられた 3 時間であった。

国後島紗那の街



日本が寄贈した舩の希望丸上の検査官等



エトピリカⅢは、23 時頃に漸く択捉島の内岡沖に到着して朝まで停泊した。午前 7 時半に択捉島から迎えに来た舩に乗船し、港から迎えのバスに乗り僅か 100m ほどの港湾事務所に向った。中・高・大生は、事務所から車に分乗し車列で紗那中等学校へ行き、意見交換と共同創作活動を行なった。シニア参加者はやはり車列で行政庁を表敬訪問し、爾後、学校へ向った。行政庁では、メドベージェフ首相がこの夏に択捉島を訪問したこと、2016 年から 10 年間に千島列島へ 700 億ルーブル（約 1300 億円）を投じて、インフラ整備、子育て支援、住宅ローンの引き下げ、25 年までに中等学校 2 校の新設を内容とする発展計画の説明があった。ちなみに、択捉島の人口は 6,000 人で、国後島は 7,000 人となっている。

紗那中等学校全景

学校の左隣には大地震の際に日本が寄贈した発電所



港湾事務所から行政庁や紗那中等学校等への移動は、常に、訪問団が分乗した 20 台ほどの車列で行った。市内の道路は今年の夏に中心部が舗装され、道路脇に点在する民家も比較的小奇麗な佇まいであった。道路は、舗装が途切れると濛々たる細かい砂塵が舞っていたが、この簡易舗装と思われる部分は、厳しい択捉島の冬を耐えられないと思われた。

五箇班の創作グループに分けられた中・高・大学生は、シニア参加者が行政庁表敬後に訪れた時には、既に紗那中等学校や子供芸術学校の生徒とともに演劇、絵画、舞踏等に分かれ、発表会に向けて練習を行っていた。グループの一つは、防毒マスクのつけ方と被災者介護の訓練をしていたのには驚いた。

車窓からの紗那の住宅



紗那中等学校における交流（演劇の打ち合わせ）



25 日夜は、船内で「北方四島と国際法」を講義し、質疑応答を行なった。これは、交流先の学生と仲良くなり北方四島がロシア領でもいいと考える中・高生に対し、領土、主権、国境等を講義することにより、交流事業の本旨を理解させるためである。27 日の午前は紗那の日本人墓参りをし、紗那中等学校でフットサル等のスポーツ交流を行なった。

日本人墓地は、比較的急な斜面に墓石が固まっていたが、ロシア人の墓石と混在していた。これは、ロシア人が日本人墓地内に勝手に墓石を建設したことによるが、択捉島への定住をあきらめて離島したと思われる荒れ果てたロシア人のお墓も散見された。

船内における食後の講義



日本人墓地参拝



27 日午後のハイライトは、別飛のロシア人家庭の訪問であった。和歌山県から参加した教員と訪問した家庭は、奥様が交流に積極的で食べきれない食事でご馳走で下され、推進委員会が用意したロシア語会話の本と簡単な英語で 2 時間半ほど意見交換を行なった。失業中の楽しみで密造酒を作るご主人、港湾事務所で働く奥様、法律を勉強中の一人娘、サケ漁船のコックをしている娘婿、これに近所のおばさんが同席した。水道や電気等のインフラはなく、車で 30 分ほど離れた紗那のお店へ買い物に行く他は自給自足だが、それでも室内はヨーロッパ風に設えてあった。ご主人はもとより娘婿も収入が少なく、生活の不安を抱えていた。夕方は子供芸術学校で夕食交流会があり、船に乗船してエトビリカⅢへ戻り、22 時に国後島沖に向けて出向した。28 日の 8 時に古釜布沖で出国手続きを行い、13

時に根室へ入港して訪問団は解散し、一部の参加者は千歳会館で記者会見を行った。

訪問先のロシア人家庭



夕食交流会と行政長臨時代行



北方四島交流に同行した日経新聞記者によれば、択捉島の人口密度は 1 平方キロあたり約 2 人で、平均給与が僻地手当を含めても月 2~3 万円しかない教師は、夜間に水産加工場などでアルバイトを余儀なくされ、31 歳の漁師は、年収が 100~30 万円で一定していないため、奥様はサハリンに帰りたがっているという。択捉島には大学がなく職業も選択できないので、サハリンや本土に進学した若者はまず戻ってこないという。本屋はもとより娯楽施設は見当たらない択捉島の生活環境は、老人のみならず若年層に至るまで厳しいことが推測された。

それでも紗那中等学校の生徒は積極的に交流会に参加し、唯一自由行動を許された買い物時間に、スーパーで二人から一緒に写真撮影を頼まれ、駐車場でも突然二人からインタビューを受けたように、島民はのどかで屈託がなかった。しかし、スーパーでは芽が出ているジャガイモやしなびた玉ねぎを売っていたのが印象的だった。択捉島はロシアの最極東の僻地島嶼であり、政府による戦後 70 年間に及ぶ支援策にもかかわらず、住民は増加していないのも事実である。冷戦時代には軍事基地として保有する意味はあったが、今日、開発支援が追いつかず過疎化する択捉島は、ロシアの重荷になりつつあるように思われた。

根室琴平町側岸壁における出迎え



千歳会館における記者会見

